トリヴァンドラム十三劇之内

使者ガトートカチャ

松村　恒　訳

登場人物

座頭（ざがしら）

兵士　クル側の兵士、名はジャヤトラータ。

ドリタラーシュトラ　盲目の老王、ドゥルヨーダナ等の父。

ガーンダーリー　彼の妃。

ドゥフシャラー　彼らの娘で、ジャヤドラタの妻。

門番女

ドゥルヨーダナ　ドリタラーシュトラの長男、クル側の総帥。

ドゥッシャーサナ　彼の九十九人の弟のうちの一人。

シャクニ　ドゥルヨーダナの叔父で、賭博の名手。

ガトートカチャ　ビーマとヒディンバーの子、クリシュナにより遣わされた使者。

（祝禱が終わり座頭（ざがしら）登場）

座頭　三界の唯一の守護者たるナーラーヤナ（＝ヴィシヌ神）が汝らを守り給わんことを。彼こそ神々に相応しき方策を多々為し、三界に止むことなき劇作の筋・序幕・結幕を貫き操るものなれ。（一）（歩き廻って）殿方御婦人方の皆々様に斯く申し上げまする。しかしはて、それがしが前口上を申し陳べたところで、声が聞こえた様ですが。先ずは見て参ることにいたしましょう。

（楽屋の内で）

とにかくお伝えしなくては、お伝えしなくては。

座頭　ははあ、わかりましたぞ。あれは、同盟軍がジ

ャナールダナ（＝クリシュナ）の朋友たるダナンジャヤ（＝アルジュナ）を他所へ誘き出した隙に、忽ちにマビマヌユ王子が、ビーシュマを殺されて怒り狂ったドリタラーシュトラの息子達に取り囲まれて、殺されたのだ。

アルジュナの帰還を恐れる王共は、アルジュナの来たる方角をうち眺め、スバドラーの息子（＝アビマヌユ）の矢に射られ傷つき気を失いて、自らの陣へと逃げ失せり。

（二）

（退場）

序幕　終

（兵士登場）

兵士　百人の子息と賞むべき縁者を持ち、知識を広く蓄え、規律ある行いをし、遠くを見つめる眼を具えた大王ドリタラーシュトラ様にとにかくお伝えしなくては。

兵士・戦車・馬・象の殺戮によりて諸王の軍を恐れさしめたる若者スバドラーの子（＝アビマヌユ）は、戦場にて遊戯もてアルジュナ〔に等しき〕武勇を示したり。されど戦いにありて四方より急ぎ迫り来たる百王によりて天空の父祖たるシャクラの膝元へと忽ちに昇らされたり

（三）

（ドリタラーシュトラ、ガーンダーリー、ドゥフシャラー、門番女登場）

ドリタラーシュトラ　おお、これは何としたことぞ。何者が余が耳に聞こゆる悪事を為したるぞ。何者が、こは余に好ましきこと、と〔偽りて〕不快なることを語りしや。何者が子殺しの罪に汚れたる我らが家系の滅亡を、恐れることなく宣したるや。

（四）

ガーンダーリー　大王様、またでございます。骨肉の争いは唯子供達を失うことをもたらすことにしかなりません。

ドリタラーシュトラ　ガーンダーリーよ、その通りだ。

ガーンダーリー　大王様、いつそうなりましょう。

ドリタラーシュトラ　ガーンダーリーよ、聞くがよい。

アビマヌユの死故に怒りを生ぜしパールタ（＝アルジュナ）は、憤りて綱・紐・鞭を手にしたるクリシュナを伴いて、今日恐ろしき弓を手にそを行わん。世が滅亡に到りたる後に、寂静は来たらん。（五）

ガーンダーリー　ああ、いとしき孫のアビマヌユ。人の殺し合いの骨肉の争いに巻き込まれ、若きみそらに我らの運命の曲り角へ散り落ちて、そんなお前はどこへ行ってしまったの。

ドゥフシャラー　今未亡人ウッタラーを未亡人にしてしまったその人が、自分の若妻を未亡人にしてしまいました。

ドリタラーシュトラ　一体誰がこの悲しみの河に、救いの橋を掛けてくれるだろうか。

兵士　大王様、私が致します。

ドリタラーシュトラ　お前は誰かね。

兵士　大王様、ジャヤトラータと申します。

ドリタラーシュトラ　ジャヤトラータよ、アビマヌユを殺せしは何者ぞ。命をいとわぬ者は何人ぞ。五条のパーンダヴァの火に自ら油を注ぎしは、誰れぞ。（六）

兵士　大王様、多くの王が一度にアビマヌユ王子に襲い掛ったとのことでございます。しかし直接手を下したのはジャヤドラタ殿の様でございます。

ドリタラーシュトラ　何と、ジャヤドラタが手を下したとな。

兵士　しかと左様で、大王様。

ドリタラーシュトラ　何と、ジャヤドラタが殺したとは。

（これを聞きドゥフシャラーは哭く）

ドリタラーシュトラ　哭いているのは誰か。

門番女　ドゥフシャラー姫様でございます。大王様。

ドリタラーシュトラ　姫、泣くには及ばん。よいか、永くやもめならざることは汝の夫を喜ばせざらん。彼自らを、ガンディーヴァの弓を持てる者（＝アルジュナ）の的となしたるに。（七）

ドゥフシャラー　お父様、嫁のウッタラーの許へ参ることをお許し下さい。

ドリタラーシュトラ　お前はあれに何を言うつもりかね。

ドゥフシャラー　お父様、こう言うつもりです。今日からずっと私もあなたと同じく、喪服に身を包んで暮らしますわ、と。

ガーンダーリー　お止めなさい、お前、そんな縁起でもないことを言うものではありません。お前の旦那さんはまだ生きておいでですよ。

ドゥフシャラー　お母様、そんな幸運は私に残されていましょうか。ジャナールダナ（＝クリシュナ）と伴なるダナンジャヤ（＝アルジュナ）に歯向って、生きていられる者がありましょうか。

ドリタラーシュトラ　不運なドゥフシャラーの言う通りだ。というのも、

クリシュナの八つの腕を枕として抱き育てられたるその子は、鋤を武器とせる〔バララーマが〕酔いてもその子を愛でて更にまた酔い、神にも等しき武勇を持つパーンダヴァ達の慈しみの的なれば、そを殺したる自らの悪行もてはこの世にて長く生き長らえることは能わざるなり。

（八）

ジャヤトラータよ、ガンディーヴァの弓持つ彼は、死せる己が子を見て、何をしたのじゃ。

兵士　大王様、アルジュナの目の前でそれが起ったとお思いですか。

ドリタラーシュトラ　何と、アルジュナはそこにいなかったのか。

兵士　おりませんでした。大王様。

ドリタラーシュトラ　それでは、どの様であったのじゃ。

兵士　お聞き下さい。同盟軍がジャナールダナ（＝クリシュナ）と伴なるダナンジャヤ（＝アルジュナ）を他へ引き寄せておいた時に、アビマヌユ王子は若気の至りから、危険を顧みずに戦いの中に入ったのでございます。

ドリタラーシュトラ　これでは当然のこと乍ら殺されてしまうわい。一体誰が虎の出入りする洞穴なんかに入っていくか。して他のパーンダヴァ達は何をし

ていたのじゃ。

兵士　お聞き下さい。大王様。
アルジュナを見んがために、自らの体を薪の上に置く者なく、王子の手足に斬り掛かる王達の名を数えんばかりなり。　（九）

ドリタラーシュトラ　ガーンダーリーよ、来なさい。
ガンジス河の岸辺に参ろうぞ。

ガーンダーリー　大王様、そこで沐浴するのでございますか。

ドリタラーシュトラ　ガーンダーリーよ、聞きなさい。
今日こそ我は己が罪にて殺されんとする汝の子らのために水供養をせん。さりながら水の奉献もても、戦いにいきり立つ王達を押し止むる力、我になし。　（一〇）

（ドゥルヨーダナ、ドゥッシャーサナ、シャクニ登場）

ドゥルヨーダナ　よいかドゥッシャーサナ。
アビマヌユを殺めたれば、遺恨は深くなれど、勝利は得られ、敵共は動揺して逃げ去れり。マドゥスーダナ（＝クリシュナ）の誇りは根絶やしとなり、且つまた今日我は、大成功もて名声を得たり。　（一一）

ドゥッシャーサナ　その通りでござる。
ジャヤドラタの軍は敵軍を圧倒し、第二のアルジュナとも言うべきスバドラーの子（＝アビマヌユ）を百もの矢を射掛けて殺めたれば、パーンドゥの子等は封鎖されたり。ビーシュマの死により悲しみ深き我等は今日息子の意趣返しから彼らの心を標的として、鋭き悲しみの矢を放ちたり。　（一二）

シャクニ　今日の戦にてのジャヤドラタの働きは大なれば、諸王をして自らの武勇を色なからしめ、戦場にて彼らの息子〔を殺したる〕により、比類なき名声を得たり。　（一三）

ドゥルヨーダナ　叔父上、こちらへ。ドゥッシャーサナもこちらへ。父上陛下に御挨拶申し上げましょう。

シャクニ　いや、ドゥルヨーダナ、そうしてはならない。
この骨肉の争いは王の喜ばざるものなれば、パ

ーンダヴァ贔屓の故に我等を難ずることあらん。戦いに勝利して後、等しく喜色満面もて王に伺候せん。（一四）

ドゥルヨーダナ　いやいや、叔父上。何はともあれ、父上陛下に御挨拶申し上げましょうぞ。

両人　ならば、そういたそう。（歩き廻って）

ドゥルヨーダナ　父上、私ドゥルヨーダナが御挨拶申し上げます。

ドゥッシャーサナ　父上、私ドゥッシャーサナが御挨拶申し上げます。

シャクニ　私シャクニが御挨拶申し上げます。

一同　これは如何に、祝福の言葉をお返し下さらないとは。

ドリタラーシュトラ　息子よ、どうして祝福の言葉など言えようか。

クリシュナとパールタ（＝アルジュナ）の心たるうら若きスバドラーの子（＝アビマヌユ）の殺められたる今、望みの断たれし生に祝辞は相応しかるや。（一五）

ドゥルヨーダナ　父上、御心の動揺は何事ですか。

ドリタラーシュトラ　御心の動揺は何事ですか、だと。息子に恵まれしこの我が家に唯一人の娘あり。そは百の息子にも勝りたり。されど汝ら肉親の恩寵によりて、めでたからざるやもめとなりたり。（一六）

ドゥルヨーダナ　父上、ジャヤドラタがどうしたと仰有るのです。

ドリタラーシュトラ　あの強き伊達男はパーンダヴァを妨げたのだ。

ドゥルヨーダナ　えっ、彼が妨げを為したですって。他の多くの者もそう致しましたが。

ドリタラーシュトラ　ああ、忌わしい。無慈悲なる者が大勢徒党を組みて一人の年若き子に襲い掛かりたり。その者どもの腕落ちんことあらざるや。（一七）

ドゥルヨーダナ　父上。老ビーシュマを謀略にて殺めし者達の腕ぞ落ちざりき。もはや幼童ならざる武勇の者を殺めた

とて、如何に我らの腕落ちるあらん。　（一八）

ドリタラーシュトラ　息子よ。ビーシュマの死とアビマヌユの殺害は同じことかな。

ドゥルヨーダナ　父上、どうして同じではないのですか。

ドリタラーシュトラ　息子よ、聞くがよい。

ビーシュマは自らの意志にて死に赴きて、己が指示によりて自ら満足せり。然るに、こはクル家の主ともなるアルジュナの第一の芽たる若者なるが、そが失われたるなり。　（一九）

ドゥッシャーサナ　父上、若者であっても、幼な子ではありませぬ。アビマヌユは……

ドリタラーシュトラ　ドゥッシャーサナは何を言うのか。

ドゥッシャーサナ　そうです。

我ら皆見て戦いたる折に、インドラの雷の如く熱き弓を手に取り、昇り来る太陽が光の網を放つにも似て、矢もて一切の王を傷つけたり。　（二〇）

ドリタラーシュトラ　うら若きスバドラーの子が一人にてそを為したとするなら、息子の死にて炎と燃えるパールタ（＝アルジュナ）は我らに何をかせん。　（二一）

ドゥルヨーダナ　何をするというのですか。

ドリタラーシュトラ　何をするかは、生きのびた者が見るがよい。

ドゥルヨーダナ　父上、アルジュナとは何者ですか。

ドリタラーシュトラ　息子よ、お前はアルジュナを知らないのか。

ドゥルヨーダナ　知りません、父上。

ドリタラーシュトラ　余も知らないのだ。しかしアルジュナの力と武勇を知る者は沢山おる。その者達に尋ねるがよい。

ドゥルヨーダナ　父上、アルジュナの力と武勇を知っていて、私が尋ねたらよいというのは、誰ですか。

ドリタラーシュトラ　息子よ、聞くがよい。

曽て無敵の鎧と生命の供物もて供養されしシャクラ（＝インドラ）に聞け。種々の武器に満足し

たる山岳族の身をしたるハラ(＝シヴァ)に聞け。蛇の奉献を待ちてカーンダヴァ森にて飲食したるアグニに聞け。今日汝を破りし呪術に守られたるチトラーンガダに聞け。（二二）

ドゥルヨーダナ　もしそれがアルジュナの武勇ならば、我等が軍にアルジュナに匹敵する者はいないというのでしょうか。

ドリタラーシュトラ　誰がそうだというのじゃ、息子よ。

ドゥルヨーダナ　カルナこそ対抗できましょう。

ドリタラーシュトラ　何だと、隣れなカルナじゃと。お笑い草よ。

ドゥルヨーダナ　どうしてですか。

ドリタラーシュトラ　聞くがよい。シャクラが鎧を取り去りたるに、不注意にも戦車を半分譲り、策略もて得たるが故に力を失いたる武器を持つ心弱きカルナは、火神、インドラ、ルドラの神々が武器を与える師とならば、アルジュナに等しきものとなることあらん。（二三）

シャクニ　陛下は私共を卑しめることに長けておられる。

ドリタラーシュトラ　今言ったのはシャクニか。されば、シャクニよ。賭博に秀でし汝の常に為せる業は、子等に対するこの一族の敵意の炎とて鎮むることなし。（二四）

ドゥルヨーダナ　何と、突然起こりしざわめきを伴う地の揺れはいづくより来たるや。天空は落ち来る流星によりてきらめくが如くなり。（二五）

ドリタラーシュトラ　息子よ、余はこう思う。孫の殺されしを見て心打ち拉がれたる大インドラの涙の滴が、必ずや流星の形を取りて落ちたるならん。（二六）

ドゥルヨーダナ　ジャヤトラータ、行って、パーンダヴァの陣営の法螺貝・太鼓・獅子吼の混ざったあの声が何であるか見て参れ。

兵士　かしこまりました。(退場し再び登場して)大王様に

栄えあれ。同盟軍により誘き出されていたダナンジャヤ（＝アルジュナ）が戻って来て、殺された息子を膝に乗せ、涙に暮れて、ジャナールダナ（＝クリシュナ）の叱責により、誓いを立てたとのことです。

ドゥルヨーダナ　何だと、何だと。

兵士　決意に満足した心と喜びの顔もて、武勇に得意然たる様子にて、突然勝利なりと喜びから咆哮せり。大地は重き山が寄り集まりたるが如きかの王により揺がされ、その様は暫し途惑う乙女の如くにうち震えたり。（二七）

ドリタラーシュトラ　誓いの声のみにても大地は揺ぎたるなれば、〔アルジュナが〕弓に触れたらば、三界は必ずや揺れ動かん。（二八）

ドゥルヨーダナ　ジャヤトラータ、どんな誓いが立てられたのか。

兵士　我が子を殺めし者、またその死を喜ぶ者共には、明日陽の昇る前に我が手によりて死を与えん。（二九）

と。

ドゥルヨーダナ　この誓いを無効にする贖罪の方法はあるか。

兵士　ガーンダヴァー弓を持ち心は昂っております。

ドゥルヨーダナ　叔父上、心は昂っております。心は昂っております。親愛なるドゥッシャーサナ。心は昂っております。心は昂っております。私共はとにかくその誓いを妨げることに努力致しませんと。

ドリタラーシュトラ　息子よ、どうするのかね。

ドゥルヨーダナ　全大軍を集めてジャヤドラタを取り巻いておきましょう。更に又

ドローナの教えの如く、破られる隙なき形に我布陣せん。象を伴い、兵を繰り出せども、望みは断たれ、思いは遂げられず、炎の中に入りて〔果てん〕。（三〇）

ドリタラーシュトラ　地に潜るとも、天界に昇るとも、いずくへもクリシュナを眼とする矢は汝を追い回さん。（三一）

兵士　若し他の誰なるも常に命令を下さんとする無慈悲なる王に語りたれば、その生命（いのち）は忽ちにして

なからん。　（三二）

（ガトートカチャ登場）

ガトートカチャ　ただ今ここに。

スバドラーの子（＝アビマヌユ）の死亡に駆り立てられ、卑劣なる心を有する敵を見んとて我来たり。円盤を持つ者（＝ヴィシヌ）の命に従わん様は、象王の餌に向いて鉤を恐れるに似たるなり。　（三三）

（見下ろして）ここはあれの陣営の入り口だな。入ってやろう。（入る）自分で自分に言い聞かせよう。いいか、

我はヒディンバーの子ガトートカチャなりて、ヤドゥ王の伝言を持ち来たり。我はここにて、自らの悪業故に敵となりし長上者に会わまほし。

ドゥルヨーダナ　来たれ、来たれ、敵の陣営に入るべし。我が好奇心大なれば、我にジャナールダナ（＝クリシュナ）の傲慢なる言を聞かしめよ。我ドゥルヨーダナはここにあり。　（三四）

ガトートカチャ　（入りて）おや、これはドリタラーシュトラ様。悪しき者共を百人生みだしたりといえども、その容貌は伊達にして重厚で勝れている。結構、結構。

年老いたりと雖も、皺は刻まれず、肩は頑健に引締まり、堅忍により百人の子に信頼を置いているが如くに見ゆ。三天を守らんと気づかう神々は恐れから、この御方を盲目に造り給えり。　（三五）

（近付いて）御祖父様、ガトートカチャが御挨拶申し上げます。（と言い掛けて）いやいや、これは順序ではない。ユディシュティラを初めとする我が長兄達が御前（ごぜん）に御挨拶申し上げております。それから私ガトートカチャも御挨拶申し上げます。

ドリタラーシュトラ　近う、近う、子よ。

汝れ兄弟を失いて心悲しみたること、我にとりても好ましからざる苦しみなり。かかる汝れの辞は相応しからず。我が子の過失により我心痛みたれば。　（三六）

ガトートカチャ　ははあ、あなた様は福徳あられるものです。尊き円盤を武器とするお方（＝ヴィシヌ）が福徳者達の後裔であられる御祖父様に語っているのです。

ドリタラーシュトラ　（座より立ち上って）尊き円盤を武器とするお方は何と仰せであるか。

ガトートカチャ　いえいえ、座にお坐りになってジャナールダナ様のお言葉をお聞き下さい。

ドリタラーシュトラ　尊き円盤を武器とするお方の仰せの通りにしよう。（坐る）

ガトートカチャ　御祖父様、お聞き下さい。

「親しきアビマヌユよ、愛しきクル族の灯びよ。愛するヤドゥ家の後継ぎよ。汝の母、叔父、我をも棄てて、父祖にま見えんという望みを抱いて天界へと昇って行ってしまった。御祖父様、独り子を失って、アルジュナの運命がかかるものならば、あなたの運命は如何なるものでありましょうか。されば今直ちに御自分の軍勢を整えられたし。あなたの子への悲しみから生ずる火にお命が供物となりて焼かれないように」と。

ドリタラーシュトラ

怒りにまかせてクリシュナはかく語りしも、武士（もの）の皆殺されたとてガーンダヴァ弓を持する者（＝アルジュナ）は耐えているのを我は見るが如き思いなり。（三七）

一同　何とこれはお笑い種だ。

ガトートカチャ　これの一体何が笑われるのですか。

ドゥルヨーダナ　これが笑われるのさ。

嫉みの念を起こしたるクリシュナは神々と共に相謀りたるか。諸王の群れがパールタ（＝アルジュナ）独りに殺されんと知るとは。（三八）

ガトートカチャ　汝笑うとも、我は円盤を手に持つ者（＝ヴィシヌ）に遣わされて語る者なり。このパールタ（＝アルジュナ）の業を聞くことこそ汝にとりて適当なれ。（三九）

それに加えて、ジャナールダナからの伝言もお聞きあれ。

ドゥッシャーサナ　こら、もう語るな。武士族を馬鹿

にする者めが。

地にありてはすべての王がその命に従うというその大王の御前にて、他の如何なる伝言も聞かるなからん。（四〇）

ガトートカチャ　どうしてドゥッシャーサナはそう言うのか。これ、ドゥッシャーサナよ。円盤を武器とする者（＝ヴィシヌ）は汝らにとって王ではないと言うのでござるか。よいですかな。

ジャラー〔サンダ〕の町から驕慢を捨てて謙虚になりし王達を救い出し、ビーシュマの手から諸王の宝物を策略もて奪いし者、それには愛らしくも見目麗わしき幸運の女神ぞ閨の伴となりたる。この誉むべき王中の王たる円盤を武器とする者は汝にとりて王ならざるか。（四一）

ドゥルヨーダナ　ドゥッシャーサナ、議論はもう沢山だ。

王であろうとなかろうと、力があろうとなかろうと、ここにて饒舌もて如何んせん。汝等の主は何と語りしや。（四二）

ガトートカチャ　されば、よろしいかな。三界の主にして尊き円盤を武器とする者こそ主なれ。特に優れて我等の主なり。更に又、

〔汝の〕武士等の滅亡は決定したりと知れ。百王達の亡骸の山より大地は軽かるべし。子息を失いて怒りの武器を振上げたるパルグナ（＝アルジュナ）にとりて、闘諍の前線にては重荷なることは何もなし。（四三）

シャクニ　言葉のみにてこの大地が勝ち取れるものならば。もし言葉にて一切の武士の殺戮が為され得るならば。（四四）

ガトートカチャ　これなるシャクニが言ったのですな。よいか、シャクニ殿。

賽を捨つべし、シャクニよ。闘いの所行にて矢の的たるに相応しき形の将棋盤を作れ。ただしここには婦女の略奪もなく、王位の簒奪もなく、札遊戯が生命にて、恐ろしき力を有する矢による楽しみあり。（四五）

ドゥルヨーダナ　おのれ、本性に帰るべし。

汝限度を越えて粗き言葉を投げ掛けたり。長き腕持つ汝は語りつつも、何ものをも顧慮せざるなり。汝母の側より猛き姿を持ちて生まれたるを誇るならば、我等も亦悪鬼の猛き本性を有する恐ろしき者なり。（四六）

ガトートカチャ　黙れ、悪を止めよ。御貴殿等は悪鬼よりもすさまじい者だ。というのは、夜鬼は漆の家にて眠る兄弟達を焼きはせず。夜鬼は兄弟の妻の頭に斯く触れたりはせず。夜鬼は戦さにて子殺しを喜びて為すことはせず。容貌は怪異にして、行状は恐ろしかれど、情けを欠くことはなし。（四七）

ドゥルヨーダナ　卿は戦う為ではなく、使者として来たるなれば、〔我が〕伝言を取りて行け。我らは使者殺しにはあらざるなり。（四八）

ガトートカチャ　（怒って）使者に過ぎぬとして拙者を侮辱するのか。何を言うか。拙者は使者ではないぞ。〔悪しき〕行状は充分なれば、束になりて掛かって参れ。弓弦を切られて力を失いしアビマヌユとは異なりたる我ここに立つ。（四九）これは子供の時からの拙者の大きな希望でござった。更に又

唇を噛み、拳を振り上げて立つは、ガトートカチャなり。閻魔の住みかへ行きたき者は起こてよ。（五〇）

（一同立ち上がる）

ドリタラーシュトラ　孫よ、ガトートカチャよ。許せ、許せ。余の言葉も聞いてくれ。

ガトートカチャ　わかりました。御祖父様のお言葉とあらば、私は使者となりましょう。とは言うものの、私は怒りを押えることができぬ。何を伝えたらよろしいかな。

ドゥルヨーダナ　誰からの伝言というのかな。わしからの言葉であるならば、次の様に伝えてくれ。

何故汝益なきことを多く語るか。我らを粗き言葉にて征すること能わず。汝戦いを挑みしとき、怒りより発したる言葉は何らも益なし。直ちに我は百王の傘蓋の列にて囲まれて出陣せん。汝

パーンダヴァ〔の諸王〕と共に待つべし。我矢もて汝に返答を与えん。（五一）

ガトートカチャ　御祖父様、それでは私は参ります。

ドリタラーシュトラ　孫よ、行くがよい、行くがよい。

ガトートカチャ　それでは諸王よ、ジャナールダナの最後の伝言をお聞きあれ。

正義を行え、身内への思いやりを為せ。心に望みたること一切をここにて行うべし。〔汝等クル〕族への教誡の如くに、パーンダヴァの姿を取りたる死神が朝日の光と共に汝らに忍び寄らん。（五二）

と。

（全員退場）

使者ガトートカチャという一幕劇　終